



## 小樽市色内「マルジェ・尚」

マルジェ・ママ / 長浜 聖子さん

# 時代が移っても商大生の「母」はいつもここにいる

事が出来ました。一発勝負のこの競技で結果を出すというのは非常に難しいものなのです。普段の練習中から体中の全神経をどれだけ集中させているか、体が無意識でも動くくらい何度も何度も反復練習をしているか、OFFが一年を通してほとんどない中でどれだけ自分を高めて大会に焦点を合わせられるか。そんな陰の努力が随所に見られるのもこの競技をしていて魅力になるところです。そんな中でのこの成績。夏の暑い時期にひたすら練習に没頭した、本当に足がおかしくなるくらい練習してとったこの成績は本当に嬉しいものでした。次はこの結果を過去の栄光にしないために、より上を求めていきたいと思えます。さらなる結果を残せるように。

主将 河地 拓民

小樽花園から少し離れた色内のマルジェは、本当の名前を「マルジェ・尚」といって、今年の10月で30年目となる。積丹入呵(いりか)出身のマルジェ・ママが若くして始めたマルジェは、最初は喫茶店だったが、いつか商大生の我が家同然の酒飲みの根城となり、「マルジェ」の名で親しまれるようになった。



「周りからはやめろって言われたけれど金のない商大生にはツケで飲ませてたんです。」 裕福な学生は少なかった。それでも飲みたい学生はマルジェに行った。試験のこと、単位のこと、就職のこと、マルジェ・ママは何でも聞いてくれて、叱られて、怒られて、励まされた。借金を残した学生は卒業して何年もかかって支払いをすませた。

「こういう商大生が卒業しても戻ってきてくれるから。出世払いってことだけど、商大生は本当に出世するからね。」

学生同士の喧嘩は無理して止めなかった。ただし店の中だけ。

「喧嘩を止めるのは自信があるんだ、腕力あるから。肝つ玉が据わっているから学生が安心してあばれるんです。」

実際、鍵をかけて店を開けてしまったこともあった。もう少しで夜明けの時刻だった。

「ゼミやクラブのコンパで大いに利用していただきました。吉田下宿や島田下宿の人たちが良く来てました。卒業旅行にも誘われたし、結婚式に呼ばれたこともある。ラグビーやテニスの応援にも行きました。火・木・土曜のゼミとクラブの日は一般のお客さんは避けてました。」

商大生だけでなく、教官も足繁く通った。学生だった若い人たちの幾人かが商大の教官となった。それから昔、マルジェは火災に見舞われたことがあった。商大生のカンパや泊まり込みの手伝いをマルジェ・ママは今でも忘れていない。

「店を建て直すとき、場所を移そうと思ったけれど、卒業した学生が帰ってくる場所がなくなってしまうので、元の場所に建てたんです。」

同世代相手の商売は、いつのまにかその息子たちを相手にするようになった。時代は移っても階段を上った扉の向こうには、世代を超えたマルジェ・ママと商大生がいる。

クライストチャーチ、オークランド、オーストラリア他たくさん場所を訪れ、信じられないような神秘的な自然を目にしたり、ペンギン、アザラシなどの野生動物を見ることもできました。週末は映画を見たり、クラブでダンスやお酒を楽しんだり、体育館に行ってバスケットボールやエアロビクスをしたりしていました。エアロビクスはたくさんの学生が参加していて、定額を支払えば、1年間好きなときに何度でも参加できるので、便利でした。

ニュージーランドに関しては、初めのうちはニュージーランド人は冷たいと感じていました。留学前に持っていたイメージと最初に受けた印象が違い、とまどったというのが本音です。しかし時間がたつにつれて、寛容で暖かい人が多いということに気付き、旅行でニュージーランドを離れたときにはキウィの人々の笑顔が恋しくなり、(日本ではなく)ニュージーランドに早く帰りたいという気持ちにすなりました。たった10ヶ月程いただけなのに、今では自分の母国のように感じています。

